

ゆうあい報 おたがびたる



特定医療法人
祐愛会織田病院 ODA REGIONAL MEDICAL CENTER

発行者 祐愛会織田病院企画室
責任者 織田 正道 <院内報>

カピオラニ・メディカルセンター・ パリモミ(米国・ハワイ州)と 国際姉妹病院に

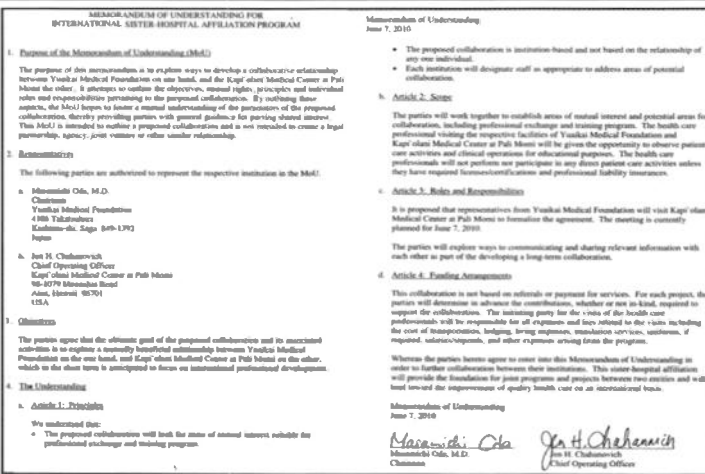
理事長 織田正道



↑写真1) 覚書を取り交わす理事長と同センター Ms.Jen Chahanovich (Chief Operating Officer: 最高執行責任者)

同センターは、一〇〇年の歴史があり、ウイメンズセンターで有名なカピオラニ・メディカルセンターの関連病院として一九八九年に開設された非営利病院です。急性期病床一六床と小規模ながらも、ハワイ州の救急医療における基幹病院として、年間四万人も

今年、神戸で開催される全日本病院学会のテーマは、『グローバル社会と医療』です。これからの日本は、あらゆる分野で国際化の流れが加速します。学会の趣旨にもありますように、医療や介護分野も例外ではなく、国を超えた技術交流、医療貢献、就労の確保が進むのは確実と思われれます。そのような中、当院は六月七日に米国・ハワイ州のカピオラニ・メディカルセンター・パリモミと国際姉妹病院として提携を行い、連携プログラムに関する覚書を取り交わしました(写真1、2)。



↑写真2) 国際姉妹病院連携プログラムに関する覚書

の救急患者を受け入れていきます。また、手術件数は二〇〇九年七三三三件を数えています。American Heart Association と American Stroke Association から冠動脈疾患の治療において高い評価を受け、三年連続、ゴールド賞を受賞しています。同センターはワイキキの中心街から車で約二〇分の所にあり、周囲は閑静な住宅地に位置しています。その建物すべてが患者中心に設計され、中庭のリラックスした空間から、細かく配慮された区画の病室へとつながり、病院に在ることを感じさせないユニークな建築デザインとなっています(写真3)。



↑写真3) カピオラニ・メディカルセンター・パリモミ外観

なることで学ぶ点が多くあると考え、この提携を結ぶことにしました。また、日本以外の国にある病院と国際交流を持つことは実に有意義です。スタッフにとつて実際に医療現場を体験できる貴重な機会であり、地域におけるヘルスケアシステム構築を進める上での参考になるものと思います。早速、双方の病院は協力して、専門家の交換、研修プログラムを含め提携のための相互の利益と可能性のある分野を設定し、早ければこの秋から、医師だけでなく、看護師、コメディカル、事務部門の派遣を開始します。

当法人は、これまでも医療分野においては、すでにインドネシアとのEPA(経済連携協定)に基づき四名の看護師候補生を受け入れています。来年度からは中国からの看護学生受け入れを検討しています。また、介護分野では、これまでの四年間、高齢化の進展に伴い増え続ける認知症高齢者に対応するため、認知症ケアで実績のある豪州のハモンドケアグループと提携し、職員教育や認知症アセスメントツールの共同開発など積極的に進め実績を上げてきました。このように将来を見据えた取り組みは、自ずと国の壁を超えると共に、当法人の基礎となる人材育成にも大いに役に立つものと考えます。

「小規模多機能ホーム ゆうあい開設」

小規模多機能ホームゆうあい
管理者 内田智弘

平成二十二年六月一日、ゆうあいビレッジに小規模多機能ホームがオープンしました。正式名称は小規模多機能型居宅介護支援事業所です。事業内容は「通い」、「泊まり」、「訪問(介護)」がサービスの柱です。

私たちの法人では、これまでもこれらの形態のサービスを提供してきましたが、別々の事業所での提供でした。小規模多機能ホームではこれらを包括的・一体的に一つの事業所で提供することになります。環境の変化に敏感な高齢者(特に認知症の方)にとつては、いつも同じ職員が対応することで混乱さ



↑小規模多機能ホームゆうあい

れることも少なくなり、より安心してご利用いただけることになると思います。また専属の介護支援専門員が給付管理・サービス調整も一体的に行うため、多様なニーズや突発的なニーズにも迅速かつ柔軟に対応することが可能となります。特に独居の方や仕事などで介護に十分な時間がとれないご家族にとつては、まさに「使い勝手のいい」サービスになると思われます。

開設に先立ち五月二十九日、竣工祝賀会を開催いたしました。樋口鹿島市長をはじめ、県議会議員、市議会議員、民生委員など多くの方々にご参加いただきましたが、この事業が一法人の事業にとどまらず、地域の事業として支持され期待されていることを改めて実感しました。



でいるにもかかわらず本人が介護サービスの利用を強く拒まれていたため、ご家族はサービスの利用を諦めていました。私たちはこの

開設より一ヶ月半が経過し、利用登録者は現在二〇名、要介護度一から要介護度五の方まで幅広くご利用いただいています。

小規模多機能ホームを知っていただくため、小規模多機能ホームならではの取り組みで利用開始となられた七〇代後半の男性のケースを紹介いたします。この方は、三年もの間自宅に閉じこもり、心身の廃用が進んでいるにもかかわらず本人が介護サービスの利用を強く拒まれていたため、ご家族はサービスの利用を諦めていました。私たちはこの



方に介護サービス利用の必要性を強く感じたため、お宅を何度も訪問し、まずは話相手として関係づくりを行いました。そうするうちに自宅周辺の散歩に出れるようになり、さらに

は施設までのドライブも可能となりました。このような段階的なアプローチが行えたおかげで、今では週二回の通いのサービスに来ていただけるようになりました。これまではサービス提供の時間や制度などの枠にとらわれて出来なかったことが、小規模多機能ホームでは柔軟に行えたため成功できた一例と考えられます。

介護が必要な方が地域で暮らしていくためには何が重要かという視点で、個々のサービスニーズを的確にとらえ、一人ひとりにきめ細やかな介護サービスが提供できるよう、これから運営していきたいと思っております。

法人スタッフへの「子宮頸がんワクチン」接種始まる!

労働安全衛生委員会(健康管理センター)

土井 弥生

二〇〇九年九月に、子宮頸がん予防ワクチン(サーバリックス)がわが国で正式に承認されました。このワクチンは、二〇〇七年にオーストラリアで承認されてから今では世界一〇〇カ国で使用されています。

子宮がんは、子宮体がんと子宮頸がんに分類されます。前者は女性ホルモンとの関係が深く、閉経後の五〇〜六〇歳の人に発症が多くみられます。後者はウイルス感染が原因であり(したがってワクチン投与が可能)、若い世代にも発症することが特徴です。発症数は、子宮体がんが年間七〇〇〇人弱、子宮頸がんが九〇〇〇人弱です(二〇〇二年国立がんセンターの統計)。

子宮頸がんの発症は、主として性行為によりヒトパピローマウイルス(HPV)が子宮頸部に感染することが原因といわれています。子宮頸部がHPVに長期間感染したままになると、感染部位でがんになる前の細胞異常(異形成)が起こり、最終的にがん化するというプロセスをたどります。問題なのは、HPVが広く世の中に存在するありふれたウイルスであることです。HPVだけで一〇〇種類以上の型が知られており、女性のほとんどが一生涯に一度は感染するといわれています。もちろん、HPVに感染したすべての人ががん化のプロセスが進むわけではありませんが、ある種のHPV(16型や18型など・ハイリスク型という)はタチが悪く、この型に感染するとがん化しやすいことがわかっています。子宮頸がんは女性の病気ですが、海外ではHPVによる男性の陰茎ガンの増加も報告されており、男子にも接種している国もあるようです。

ワクチンは、接種後の一カ月と六カ月後に三回接種します。海外では一〇歳から十二歳の女子への接種が進められていますが、わが国では一〇才以上の女性となっています。

当院では、職員の健康を守る観点から、法人の補助を得て、希望者に接種を勧めています。現在まで三〇名の職員に実施しました。副作用は報告されていませんので、もっと多くの職員に接種していただきたいと思っております。希望者は健康管理センターへご相談ください。

新任 Dr 紹介



内科医師 内藤優香

(出身大学) 佐賀大学医学部
〔専門領域〕 総合診療部



四月より内科(総合診療)で勤務させていただきます。内藤です。佐賀大学医学部附属病院で臨床研修を終え、同病院

の総合診療部に入局し、医者としては四年目になります。医局の大先輩である西山院長を始め、諸先輩方、また他科の先生にも指導をさせていただきながら、楽しく仕事をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

三年目は大病院に勤務し、多くの問題点を抱える患者さん、診断がなかなかつかない患者さんなどを、じっくり診療していくという日々でした。症例数は少ないながらも、様々な分野の疾患を診ることが出来、大変勉強になりました。四年目は、ぜひ地域でcommon diseaseを多く学びたい、と希望をだし、今回織田病院に来ることができました。地域連携が盛んで、患者さんから信頼されるこの織田病院でその勉強ができることを、大変嬉しく思っております。日々精進し、織田病院に少しでも貢献できるよう頑張りたいです。

患者さんの声に耳を傾け、患者さんの体・心におこる様々な問題を総合的に診て、患者さんと一緒に解決していくというのが、総合診療部に属している私の、理念というか目標です。臨床力はまだまだ未熟で、至らぬ点多々あると思いますが、まずは話しやすい雰囲気を持ちつつ、毎日の診療で経験を積んでいきたいと思えます。

日々笑顔で頑張ります。どうぞよろしくお願ひ致します。

皮膚科医師 桑代麻希

(出身大学) 佐賀大学医学部
〔専門領域〕 皮膚科



本年四月より勤務しております。皮膚科の桑代麻希です。佐賀大学を卒業し、二年間の初期研修を終え現在医師として

三年目です。外科新任の奥山先生と同期(同級生)になります。今まで皮膚科は洋子先生お一人でしたが、本年度より織田病院が日本皮膚科学会認定専門医研修施設として指定されたため、洋子先生のもとに私がめでたく赴任することができました。皮膚科医として、医師として、まだまだ修行の身ですが、洋子先生をはじめたくさんの力をお借りながら、毎日楽しく働かせていただいております。生死に関わるような皮膚疾患も決して少なくはありませんが、生死には関わらない疾患でも患者さんのQOLに深く関わってくることも多いため、外来には沢山の患者さんが皮膚の悩みで受診されます。治療の効果が目に見える形でするので、患者さんと一緒に喜んだり、悩んだりしていますが、一人でも多くの患者さんの笑顔が見られるようにまだまだ日々精進です。

また皮膚科だけではなく、形成外科の外来手術、デクビタスにも参加させていただいているので、この貴重な機会に少しでも多くのことを吸収できればと思っております。

まだまだ足りない点も多く、ご迷惑をおかけするかと思いますが、織田病院のいろいろな方との出会いに感謝しながら、少しでも皆さんのお役にたてるよう、充実した時間を過ごしていきたいと思っております。

どうぞよろしくお願ひいたします。

外科医師 奥山桂一郎

(出身大学) 佐賀大学医学部
〔専門領域〕 一般・消化器外科



本年四月より勤務しております。外科の奥山桂一郎です。医師になって三年目です。二年間は初期臨床研修制度のために佐賀大学医学部付属病院に勤務し、各科をローテーションしながら勉強してまいりました。そのため、

外科医師としてはまだまだ未熟であり、手術はもろろん病棟業務に関しても不慣れな部分が多く、多くの諸先輩方はじめスタッフの方にはご迷惑をおかけしていると感じております。私は地元が塩田町であり、鹿島高校出身でもあり地元の病院で勤務できることを嬉しく思っております。スタッフの方にも地元の先輩や後輩も多く、良い雰囲気の中で働くことができていると思います。

私が外科医を志したのは、純粹に手術をしたいという思いがあるからです。こちらで勤務するようになってから術者として手術をさせていただく機会もあり、合併症の怖さやあまりにも未熟すぎる自分の知識から手が動かさず怖いと思うことも多々あります。しかし、患者さんが手術が終わって、ありがたうと言ってもらえると何事にも変えられない嬉しさがあります。これからも先輩方のやさしい指導のもとに初心を忘れることなく、手術手技の研鑽に邁進してまいります。

まだまだ若輩者であり、本当に多くの方々に支えてもらっている実感している毎日です。すこしでも織田病院のために何か貢献できればと思っております。今後ともよろしくお願ひします。

訪問看護ステーション ゆうあい、病院へ

訪問看護ステーション ゆうあい 小森ヒロ子

訪問看護ステーション ゆうあいは、平成九年に介護老人保険施設ケアコートゆうあいとともにおープンしました。以後、通所サービス、居宅介護支援事業所、ヘルパーステーション、グループホームなど、様々なサービスを構成してまいりましたが、ただ一つ他部門との相違がありました。それは、訪問看護の利用は介護保険だけでなく医療保険でも可能だということです。

現在、介護保険と医療保険の比率は6:4で、小児や難病患者様、またターミナルの患者様等は医療保険を利用されています。財政的な理由から在宅医療を推進しようとする国の施策からだけでなく、自己決定権とQOLを重視する患者様やご家族の思いもあって、いかに重症であろうと、いかに医療器具をたくさん装着してしようと、自宅で療養生活を送りたいと願う患者様が増えています。そういった時、訪問看護の出番なのです。在宅復帰するにあたっては、「我が家が帰りたいが家族に迷惑をかける」、「何がおこるかかわらないので怖い」、「HOT、吸引、胃瘻、点滴等の管理がわからない」等々、精神的また医療技術的な様々な問題が起こってきます。

これらの問題により一層迅速に対応するために、訪問看護ステーション ゆうあいは六月に当院の地域連携室に移転しました。ここでは、リエゾンナーやMSWとじかに顔をあわせることで密接な情報交換が行えますし、先生方、病棟、外来とともに、訪問看護の利用者の掘り起しがよりスムーズにできてくると思います。また、訪問看護を利用している患者様に変化があれば、スピーディーに主治医に報告でき対応が図れるというメリットは大きいものです。さらに、病院に移動したことで、最新の医療情報、看護技術を身につけ、さらなる看護の質の向上に努めていると思えます。ピンクのユニフォームが派手かとは思いますが、今後ともよろしくお願ひします。